

マーク・トウェインの英話

—「ハックルベリー・フィンの冒険」を対象作品として—

四方田 敏

内 容

1. はしがき
2. “Huckleberry Finn” の英語
 - 〔A〕 表現について
 - 〔B〕 語法について
3. む す び

1. はしがき

「アメリカの近代文学はすべて、マーク・トウェインの“Huckleberry Finn”という一書から発している」というヘミングウェイの言葉は、あまりにも有名であるが、これは主として“Huckleberry Finn”の散文のスタイルに就いて述べられた言葉であろうことに先づ異存はないであろう。マーク・トウェインとヘミングウェイを比較してみると、なかなか興味深いものがあるように思われる。“Huckleberry Finn”とヘミングウェイの作品がその思想は別としても、その口語的文体の点において類似していることは、両者の作品を見比べてみると自ら明らかになるところである。少し余談になるが、ヘミングウェイの初期の職業は新聞記者であり、又海外通信員であった。新聞記者の記事にはきびしいジャーナリスティックな文体が要求される。大げさな形容詞はできるだけ排除されて、簡潔平明な文章を書かねばならない。このような人生初期における記者としての訓練が後のヘミングウェイの散文スタイルに影響を与えた主要な原因の一つとして考えてよいのではなからうか？ 次にあるのはヘミングウェイの短篇“The Undefeated”の

書き出しの文である。

Manul Garcia climbed the stairs to Don Miguel Retana's office. He set down his suitcase and knocked on the door. There was no answer. Manuel, standing in the hallway, felt there was someone in the room. He felt it through the door. 主に短い単文が and でつながれ、終止符で切られながら淡々として書かれて行く、これは明らかに口語リズムを持った文章であると言えるであろう。次に出ている英語の文は“Huckleberry Finn”の第一章の書き出しの文である。

You don't know about me without you have read a book by the name of *The Adventures of Tom Sawyer*; but that aint no matter. The book was made by Mr. Mark Twain, and he told the truth, mainly. There was things which he stretched, but mainly he told the truth. That is nothing. 説明するまでもなく極めて平明な文である。関係代名詞 which を含む複文構造もあるが、それとても単純な構造であることに変わりわない。リチャード・ブリッジマン⁽¹⁾は19世紀には文章語として、いわば卑語であった口語(方言、俗語を含めた日常語)がトウェイン、ジェイムズ、スタインを経てついに、ヘミングウェイにおいて文章語として確立されて行く事情を系統的に述べている。マーク・トウェインがアメリカ文学における口語の散文スタイルの先鞭を付けた第一人者として重要視されていることに変わりわないのである。マーク・トウェインは“Huckleberry Finn”において Huck なる一少年に一人称で物語る narrator として登場させ、少年に特有なあの新鮮な好奇心をもって、彼の見聞したことを自由自在に語らせるのである。そこにあるのは生々とした素朴な行動的な少年の世界であり、少年の感覚であり、少年の言葉である。加えて又アメリカ特有の生活のデテイルである。従って俗語や卑語や方言——トウェインによれば三つの方言とその変種——がふんだんに語られるのである。従来の伝統的文学——多分にイギリス的であった文学からその影響をふり切って、アメリカ精神を表明したのがトウェインの文学であると言っても言い過ぎることはないであろう。T. S. エリオットもマーク・トウェインをドライデンやスイフトと共に、書くことの新しい手法を発見

した作家の一人として評価しているのである。扱て、筆者が興味を持つものは、マーク・トウェインが“Huckleberry Finn”において使用した英語であり、又その語法である。つまり語学的立場からの考察である。文学としての研究は文学の領域に委ねられねばならない。先に述べたように“Huckleberry Finn”のアメリカ文学における意義は決して小さくはない。正しくアメリカ文学の傑作と称してもなら不思議はないのである。かのサマセット・モームもこの“Huckleberry Finn”をその「読書案内」のアメリカ文学の部門で推薦しているのである。筆者はこの小論では“Huckleberry Finn”の英語の実際に焦点をしばって考察してゆく所存である。

2. “Huckleberry Finn”の英語

〔A〕 その表現について

(I) 文体及び比喩

“Huckleberry Finn”の英語について考察しようとする時、自然とその姉妹篇である“The Adventures of Tom Sawyer”が想起される。同じ少年の冒険物であるこの二作品を比べてみたい興味がでてくるのである。“Huckleberry Finn”は1885年の作品であり“Tom Sawyer”の方は10年遡って1875年のものである。文学作品としてみれば、“Huckleberry Finn”の方が“Tom Sawyer”よりも優れた作品であることは衆目の一致するところであろう。Tom Sawyerの世界はHuckの世界よりもはるかに狭隘であり、Huckの世界はアメリカのミシシッピ川流域地方の一つの叙事詩ともいべき展開があり、又文体もイメージが鮮明で生々としているように感じられる。“Huckleberry Finn”のスタイルはその口語スタイルとして、前述したように一大特色を発揮しているが、“Tom Sawyer”にはそのような特色らしきものは目立ってある訳ではない。マーク・トウェインは言葉について、真剣に次のように言っているが、このような精神が“Huckleberry Finn”には生かされていると見てよいであろう。「話す言葉は活字になるや否や、それを耳で聞いた時のものとは同じ物ではないことが知れる。非常に大きな何物

かがその言葉から消失することに気づく。それは言葉の魂である。残っているものは青ざめ、硬直したいとわしい死体である」なにかしら自虐的な言葉とさえ受取れるのである。しかしトウェインの言葉に対する心構えの一端がうかがわれて興味深いのである。次に“Huckleberry Finn”と“Tom Sawyer”から筆者の目を引いた箇所を引用してみることにする。先づ“Huckleberry Finn”の例をみよう。Huckと黒人Jimとが共に筏の上で暮している時の或る夜の対話である。

It's lovely to live on a raft. We had the sky up there, all speckled with stars, and we used to lay on our backs and look up at them, and discuss about whether they was made or only just happened, Jim he allowed they was (=were) made, but I allowed they happened. 実に淡々として平明に書かれていることが理解される。感傷らしいものもなく素朴で静かな情景であると言ってよいであろう。“Tom Sawyer”から次に例を引く、トムが川の上の筏に腰かけて川の流れをみつめながら思い廻らす情景を描写したところである。少し長いが引用することにする。he seated himself on its outer edge, ... wishing, the while, that he could only be drowned all at once and unconsciously, without undergoing the uncomfortable routine devised by nature. で始まる。彼は筏の端に腰かけながら自然によってたくらまれたあの厄介な手続を踏まずに知らぬ間に一瞬の中に溺れ死ぬことができたらいいと思っているのである。この文から少し先へ行って次の文が出てくる。Would she cry and wish that she had a right to put her arms around his neck and comfort him? This picture brought such an agony of pleasurable suffering that he worked it over and over again in the mind and set it up in new and varied lights till he wore it threadbare. 前の“Huckleberry Finn”の淡々とした軽快な調子に比べるとこの文はなんとなく重い、又情緒的で formal な表現らしく感ぜられる。これら二つの例文によるだけでも、この二作品の文体の相違が或る程度理解されるというものである。又“Tom Sawyer”の作品の表現には暗喩が所々使われてい

るのが目に止まるのである。例えば *Imagination is busy sketching rose-tinted pictures of joy. he was in the full bloom of luxurious contentment. he warmed himself in the sun of his own grandeur. 又 whisperings that extended far and wide, washing even to the bases of isolated and incorruptible rocks like Sid and Mary.* などである。これに対して “Huckleberry Finn” には暗喩的表現は少いのである。しかも “Tom Sawyer” の場合とちがって極めて簡単なものである。It was kinder than thin ice. 事態がひやっとするような心もとない事の表現である。又 It (=conscience) takes up more room than all the rest of a person's insides. 良心が人間の内臓の中で一番場所を占めているという比喩である。又 the plain hand of providence slapping me in the face とか he was in bloom, he was a blossom 又 luck didn't run my way, breathe the pure air of freedom, 又 everything smiling in the sun 等、これで分かる様に極めて平明な metaphor である。これに反して、直喩的表現はかなり多用されている。筆者の目に止まったものだけでも40例以上はあった。それらの例をいくつか列挙してみよう。he just slid the lid along *as soft as mush*. mush とは米方言でとうもろこしがゆ (とうもろこしの粗粉を水または牛乳で煮た濃いかゆ) のことである。she jumps, with her face *afire like sunset*, her eyes was all lit up *like glory*. she looking *like the most loveliest parasol*. everything *as still as a mouse*. 実に静かなという意味である。he straightened himself up *like liberty pole*. liberty-pole とは独立戦争の当時急進党集合の目標に立てた旗竿で上には liberty-cap (自由の帽子) が被せてあったと言われる。又 I shook *like a leaf*. It was *dark as pitch* there. She was coming in a hurry, too looking *like a black cloud with rows of glowworms around it*. この場合 she とは船のことで、glowworms とはつちぼたるの意、まわりにほたるの列をかけつらねた黒雲のようにと意味である。なかなか印象的な直喩的な比喩のように思える。wide-open furnace doors shining *like red-hot teeth*. *dark as sin* again in a second and now you'd hear the

thunder let go...真暗になるという意、嵐の場面の描写である。everything *still as rocks*. 研究社新大英和などには *firm as a rock* の例が出ているが、岩のように静まり返っているというトウェインの比喩は感覚的に興味が感ぜられる。Why, cert'nly it would work, *like rats a-fighting* この場合の *it* は計画を指すのであって、計画がねずみの喧嘩のように簡単に片がつくという意味、比喩が少年らしい素朴さを表わして面白。It's *as mild as goose-milk* これはすぐ前の“そんな骨の折れない計画のどこが面白いと言うんだい”と言う文につづく文句である。鷺鳥の乳のように味がやわらかであって計画としてはどうって言うことはない、面白味がないという意味 *he come ca'm (=calm) and important, like th ram*. *ram* とは雄羊のこと。I slid out of the jacket *quick as lightning*. *he crawled out again drunk as a fiddler* これはどの辞書にも出ている常套文句である。I felt *as light as a feather* right straight off. これも常套的比喩である。his mouth opened up *like a trunk*, I shot head-first off of the bank *like a frog* よく使われるような比喩である。make him swear to be *silent as the grave*. Aunt Solly she see it and turns *white as a sheet*. in about a half an hour they was *as thick as thieves* again. 非常に親密という意味。They are *as tall as a tree*. the house was all *as still as death* これらはいずれもきまりきった比喩と言ってよい。きまりきった比喩文句でないものとしては次の様なものがある。I've pegged along ever since, *dry as a powder-horn* 火薬入れのようにからからに乾いてという意 又 she stood, a-beaming and a-smiling *like a house afire* 大げさな比喩であるが直覚的であり、端的であって、そこがかえって面白く感ぜられる。次に you're always *as polite as pie* to them. これはマーク・トウェインが好んだ比喩表現のようである。しかし、マーク・トウェインが作り出した比喩であるとは言えないようである。“Huckleberry Finn”には次の様な文句もある。he dressed him up clean and nice...and was just old pie to him, so to speak. 研究社の新英和大辞典には〔米口語〕として *be as nice [good] as pie* がとても機嫌が〔愛想〕がよいという意味で出てい

るが、OED や Random House や Webster の大辞典にはそのような形のものとしては載っていない。しかし A Mark Twain Lexicon によれば、これはアメリカニズムであると言われ、the essence of goodness, or amiability; the personification of kindness であると註釈がついている。それからもう一つ注意されるものとして次のようなものがある。he'll walk in Huck's money *as easy as nothing* である。これはいとも易々という意味である。他にも次のような二例がみられる。Buck said she could rattle off poetry *like nothing*. Jim and me laid into that grindstone and walk her (=the grindstone) along like nothing. 易々と丸砥石を運んだという程の意味である。ちなみに laid into (lay into) は pitched into と同意であって(仕事)を盛んにやることである。これは俗語又は口語用法であるとマーク・トウェインの Lexicon には記されている。又同じ Lexicon によれば、like nothing については to a superlative degree, used as an adv. intensifier と説明されている。又これと似たような表現として、like everything が使われている。it come on to rain and blow and thunder and lighten *like everything* 又 It jolted her up *like everything*, of course. この言い方も like nothing と同じ様に強意の副詞としての用法を持つ。そして、激しく、とか猛烈にという意味をあらわすのである。両方とも口語的な表現と考えてよいであろう。like everything という形は Webster の大辞典には出ているが日本の辞書には like anything という形で出しているものが多いように思われる。しかし、新英和中辞典(研究社)では like everything はアメリカの口語として示されている。両方の言い方は同じ意味を表わすと考えてよいだろう。以上が“Huckleberry Finn”に出てくる比喩表現の大体である。なかには決りきった言い方もあれば、又なかなか発想の面白いものがあることが知れたと思う。

(II) 接続詞の the first time...の形式

ここでは接続詞用法の the first time について述べることにする。“Huckleberry Finn”ではこの形式の言い方が用いられているのが目につくのである。尾

上政次教授⁽²⁾の言によれば、この場合 *the first (time)* は *as soon as* と同じ意味の時の副詞節となると言われ、米語にきわめて多い形であるとのことである。例示しよう。

1) *the first time* the lightning showed me one that wasn't chained I snatched it and shoved.

2) I said, paddle ashore *the first time* a light showed.

3) *First* you know you'll get religion, too.

3)の様唯一語の *first* が用いられている場合もある。「ふと気がつくと」という様な意味であろう。

4) Then we can rush him away *the first time* there's an alarm.

5) I thought he was a good man *the first time* I see (=saw) him.

6) *The first time* I caught (=caught) Tom private I asked him.

7) the first I knowed (=knew) the king got a-going.

又 *the first time...*の形式と類型的なものとして次にいくつかの例文を示してみよう。

1) We got to hunt up something to make a saw out of *the first chance* we get.

2) I was pretty tired, and *the first thing* I knowed (=knew) I was asleep.

3) *Another time* a man comes a-prowling round here you roust me out, you hear?

3)は「今度人がやって来たら」という意味である。

4) Tom showed him how we could alter them (=our plans) in a minute *any time* there was an alarm.

以上説明して来たいづれもがきびきびしたアメリカ的な口語表現の特色をいかんなく発揮していると言うことが出来るであろう。

(Ⅲ) *blamed if...*の形式

次に “Huckleberry Finn” の中で気がつくことは *blamed if...* の形式が割に多く用いられているということである。これは「絶対に～ではない」という否定の表現であることはよく知られている。トウェインの *Lexicon* によればこの表現はアメリカニズムの方言であるとされている。否定の強調的ニュアンスが感ぜられる言い方である。

- 1) *Blamed if he warn't the horriblest-looking outrage I ever see. (= saw)*
- 2) *Blamed if he didn't inquire about everybody and everything in that blessed town.*
- 3) *Blamed if he didn't drop a carpet-bag and bust (=burst) out a-crying.*
- 4) *Blamed if I think I'd trust you....*
- 5) *Blamed if I know—that is, what's become of the raft.*

1)~3) のように *blamed if...not...* となれば当然強い肯定形になる。又 “Huckleberry Finn” には例文のように *I am* の省略されたものが好んで用いられている。次にこの表現の類型とみられるものを拾い出してみることにする。

- 6) *Blest if I kin (=can) see de pint (=the point)*
- 7) *I'm derved if I'd live two mile out o' (=of) town.*
- 8) *Blest if I didn't think the ice was getting mighty ice.*
- 9) *Blest if the old nonesuch ain't a heppin' (=helping) us out agin (=again)*
- 10) *Dog my cats ef (=if) I didn hear sumb'n (=something)*

7) の *derved* は *damned* のなまったものである。

10) *dog my cats* という言い方はなかなか面白い表現であるが、これは *Craigie* の *A Dictionary of American English* によるとこの外に *dog my skin* と言い方もあることが記されていて、*used in mildly profane imprecations* と説明されている。又 “Tom Sawyer” には *If I don't, blame my cats.* のよう

な言い方もみられる。8) と 9) の blest は blessed の形としても用いられ、反語的に「のろい」の表現となっている。この外に否定的表現として用いられるいくつかの表現を “Huckleberry Finn” から拾い出してみることにする。始めに by a long sight という形が時々用いられているのに気づく。これは肯定形では by a good deal の意味であるが、通常肯定形よりも否定形 not by a long sight 又は not by a considerable sight という表現で用いられることが多いのであって、“Huckleberry Finn” でもこの否定形が用いられている。意味は「全く～でない」という強意の否定をあらわす口語又は俗語用法である。

- 1) I see it warn't no perfumery, neither, *not by a long sight*.
- 2) but I wouldn't 'a' turned in anyway if I'd had a bed, because a body don't see such a storm asthat every day in the week, *not by a long sight*.
- 3) I asked her if she reckoned Tom Sawyer would go there, and she said *not by a considerable sight*.
- 4) I reckon he warn't (=wasn't) a coward. Not by a blame' sight.

この形の表現について OED の「Supplement」は、アメリカの例として 1896 年のものを示しているが上記の例文のようにそれより早くマーク・トウェインの作品にみられるのである。この外に否定形に用いられて、強意を表わす表現についていくつか例文をあげてみる。

- 1) I don't give a dead rat what the authorities thinks (=think) about it nuther (=neither)
- 2) I don't care shucks for the morality of it.
- 3) Do you reckon Tom Sawyer would ever go by this thing? Not for pie, he wouldn't.
- 4) I wouldn't give a dern for a million un um (=of them)
- 5) He said if he ever got out this time he wouldn't ever be a prisoner again, not for a salary.

6) Well, if ever I struck anything like it, I'm a nigger.

1)の直訳すれば死んだねずみ程にも頓着しないという表現はなかなか具体的であり、又視覚的できえあって興味深い。ここで not~a dead rat と言うのは「全く~しない」と言う強意の否定表現となるのであって I don't care a straw とか、I don't care (give) a darn (a damn) と同じことになるのである。方言かあるいは俗語的な言い方とみられるものである。2)の shucks は方言的用法であり、アメリカニズムと見てよいと思う。shucks とは無価値なものの意であり、通例否定形で用いられるのである。3)の pie はトウェインの Lexicon によると比喩的用法であって something to be eagerly appropriated, a prize, a treat, a bribe の意味であり、アメリカの slang とされている。not for pie は「全く~ない」という位の強い否定表現と考えてよい。4)の dern は darn の方言的異形であって、darn は damn にひとしい訳である。6)の nigger という言い方も興味深い表現であり、nigger とは軽蔑的な意味を表わしている。だからこれから「いまましい」というニュアンスも出てくるように思われる。従って if..., I am a nigger というのは if..., I am blamed と同じぐらいの意を表わすように思われるのである。これも方言的か又は俗語的な言い方であると考えるとよいであろう。

(IV) Flat Adverb

“Huckleberry Finn” ではこの flat adverb が作品全体を通して、随所に使われて居り、これがこの作品の一つの特色をなしているときえ言ってもよいと思う。尾上政次教授⁽³⁾も「“Flat Adverb” の使用の観点だけから見ても、現代米文学にもこれに比敵する徹底さを見つけることは困難であろう」と論じているのである。形容詞を修飾する場合でも、動詞を修飾する場合も、共によく用いられている。次に例文を示す。

- 1) She done it so *beautiful*.
- 2) I done (=did) the best I could; I did *honest*.
- 3) Just then Jim begun (=began) to breathe *heavy*.

- 4) You had to go to bed and get up *regular*.
- 5) This shook me up *considerable*.
- 6) I could see them *first-rate*, but they couldn't see me.
- 7) He bounced up and stared at me *wild*.
- 8) We had *mighty* good weather as a general thing.
- 9) It was a *powerful* fine sight.
- 10) They used *considerable* many cuss-words.
- 11) I am *rotten* glad of it.
- 12) It was a *monstrous* big river here.
- 13) Your pap's got the smallpox, and you know it *precious* well.
- 14) We could see them (=the snags) *plenty* soon enough to throw her head this way or that and miss them.

“Huckleberry Finn”の中で flat adverb としてもっとも頻用されているものは mighty であり、これは何処にでも見つけることが出来る程であるが、もっぱら形容詞を修飾する副詞として用いられている。次に例が多いのは powerful と considerable であって、前者は形容詞を修飾するものとして使われ、後者は形容詞、動詞の両方を修飾する機能を持っているのである。又 mighty は OED によれば colloquial 又は familiar である。powerful は副詞用法としては dial 又は vulgar であり、considerable のそれは己に撥用語か又は dial であるとされている。precious は colloquial であり、monstrous は OED によれば、今日では rare か又は撥用の語である。例文 1) の beautiful の副詞用法については Webster の大辞典によれば substandard と説明されている。又例文 11) の rotten の副詞用法については OED も Webster も記述していないが OED の rotten (形容詞) の項には俗語で単なる虚辞と記されている。ここでは強意語と考えられ、awfully などと同じものと考えてよいであろう。この外形容詞、副詞の両用法をもつ興味ある語に、poison がある。これは pison 或は pizen という風に綴られる。そして副詞の場合には強調をあらわして exrtremely とか excessively

という意をあらわす。形容詞としては A Dictionary of American English on Historical Principles によれば hateful 又は very objectionable であり、又 The English Dialect Dictionary によれば、一般に人間について bad, disgusting, contemptible という意味を持つ語であると説明されている。次に例文を示す。

- 1) The old man was looking his level pisonest.
- 2) He said it would take him such a pison long time to dig them into a rock he wouldn't even get out.

最後にもう一つ “Huckleberry Finn” の中に時々出てくる語として面白く感じられるものに nation と言う語がある。これは damnation の短縮されたもので名詞、形容詞、副詞の用法をそれぞれ持っている方言である。

- 1) I'm nation sorry for you.
- 2) It was a most nation tough job.
- 3) But dis (=this) one do smell so like de (=the) nation.
- 4) Why, what in the nation do you mean?
- 5) Well, what in the nation do they call it the mumps for?
- 6) How in the nation are these fellows going to be ransomed?

副詞の場合は extremely とか very の意であり、形容詞の場合は great や large の意である。3) の like the nation は like the devil の意味で「猛烈に」とか「激しく」という意味である。疑問詞と共に用いられている in the nation は疑問の意を強めているのであろう。

(V) 誇張した表現

“Huckleberry Finn” には数字による誇張的な表現が時々用いられているのが目につく。これは口語的な表現の流れにおいて当然かも知れない。根は単純素朴なものなのであろう。

- 1) I wouldn't lay de (=the) weight er (=of) my finger on um (=them), not f'r (=for) *ten hund'd (=hundred) thous'n (=thousand) billion*

dollars.

- 2) If you are anywheres (=anywhere) where it won't do for you to scratch, why you will itch all over in upward of *a thousand* places.
- 3) and here they (=the dogs) come, making powwow enough for *a million*
- 4) Once I said to myself it would be *a thousand* times better for Jim to be a slave at home where his family was.
- 5) And when they got to the grave they found they had about a *hundred* times as many shovels as they wanted.
- 6) He said he druther (=would rather) see the new moon over his left shoulder as much as *a thousand* times than take up a snake-skin in his hand.
- 7) the thing's awful mixed now; trying to better it, I've worsened it a *hundred* times.
- 8) I wished I could tell her *a thousand* lies.
- 9) I'd be willing to stand *a thousand* such jokes to have you here.
- 10) I reckon I had hunted the place over as much as *a hundred* times.
次は同じ語の反復による誇張的表現がある。
- 1) I reckon I've thought of her *a many* and *a many* million times and of her saying she would pray for me.
- 2) it takes them *weeks* and *weeks* and *weeks* and for *ever* and *ever*.
- 3) They (=prisoners) always make their pens out of the hardest, toughest, troublesome piece of old brass candlestick and it takes them *weeks* and *weeks* and *months* and *months* to file it out.
- 4) I'll think of you *a many* and *a many a time* and I'll pray for you, too.
- 5) We dasn't (=dared not) stop at any town for *days* and *days*.

無論、強意を表わしていることもあるだろう。

(VI) 同一語句の反復使用

“Huckleberry Finn” では又同じ語句の反復使用が見られる。これは一つの言葉を印象づけようとする効果をねらったものであろう。修辭的的技巧と考えてもよいものである。

1) There warn't no color in his face, where his face showed; it was *white*; not like another man's *white*, but a *white* to make a body's flesh crawl,—a tree-toad *white*, a fish—belly *white*.

2) Such a town as that has to be always moving *back*, and *back*, and *back*, because the river's always gnawing at it.

上記 1) の例では *white* が 6 回、執拗にくり返されている。2) では *back* が三回現れている。

3) the trees thrashing around in the wind, then comes a h-whack!—*bum! bum! bumbleumble—um—bum—bum—bum.*

bum は雷の音の擬音である。

4) So he set his ear to the crack and *listened*, and *listened* and *listened*.

5) I found plenty strawberries, ripe and prime; and *green* summer grapes, and *green* razberries; and the *green* blackberries was just beginning to show.

同じ語の二回のくり返しの例はかなり多い。

6) Jim *suched* and *sucked* the jug.

7) so he *thought* and *thought*

8) and it (=the auction) *strung along*, and *strung along*.

これは競売がだらだらと続くという倦怠感があらわされているように思える。

9) Tom he *talked along* and *talked along*.

止めどもなく話すという感じである。

10) So we *dug* and *dug* with the case-knives till most midnight; and

then we was (=were) dog-tired.

掘ることの疲労感があらわれていると言える。

- 11) so they *dug* and *dug* like everything.
- 12) he just *gazed* and *gazed* down sorrowful on them (=those new-comers)
- 13) I couldn't do nothing but *sweat* and *sweat*.
- 14) It was a *mighty nice* family and a *mighty nice* house.
- 15) The nearer it got to noon that day the *thicker* and *thicker* was (=were) the wagons and horses in the streets.

又ブリッジマン⁽⁴⁾は alliteration や rhyme などが “Huckleberry-Finn” にはかなり多く試みられているという事実を指摘しているのは興味深い。例えば cold corn-pone, cold corn-beef, butter and butter milk には意識的に音の連合がなされていると見られる。トウェインは音 (sound) に対する感覚が非常に鋭い人であったと考えてもよいようである。次の文には alliteration や rhyme がみられる。He was often moaning and mourning that way nights. moaning と mourning とが頭韻をなしており、両語とも音が類似しており、しかも語義までも類似した意味を表わして興味深い。

a nice innocent-looking young country jake setting (=sitting) on a log swabbing the sweat. s の頭韻がみられる。The duke he fretted and sweated around. fretted と sweated とが韻をふんでいる。they begun to unscrew the lid, and then such another crowding and shouldering and shoving as there was, to scrouge in. unscrew, crowding, scrouge が rhyme しており shouldering と shoving とが頭韻をなしているのがみられる。

(VII) be+for...ing の形式

“Huckleberry Finn” には又上記の表現が時々用いられているのが目につく、この場合の for は Wright の The English Dialect Dictionary によれば be 動詞と共に用いられて、desire, incline to, intend, purpose の意をあらわすと説かれている。

- 1) “Put up that pistol, Bill” Bill says. “I don’t want to, Jack Pachard. I’m for killing him.”
- 2) Jim was for putting our traps in there right away.
- 3) I’m for putting him out of his troubles.
- 4) I’m for going and getting in the cabin first.

(Ⅷ) sure as you are born の形式

最後にこの形式について述べて「表現」の項を終えたいと思う。マーク・トウェインはこの言い方を割合に好んでいたようで“Huckleberry Finn”の中に散見されるのである。これはいわゆる「確かに」とか「相違なく」という確言、確認を表わす口語用法であって「新大英和（研究社）をみると sure as death, sure as fate, sure as nails (or a gun) と出ており、これらは又、sure as you live 又は sure as you are living と同じ意を表わす訳である。上記の sure as you are born は sure as you live (are living) と同じ意味と考えてよいものである。

- 1) Shore’s (=sure as) you’r born, he’ll turn state’s evidence.
- 2) Sure as you are born, I did clip it along.
- 3) We’re going to get into trouble with Aunt Sally, just as sure as you’re born.
- 4) He’s got the brain —fever as shore (=sure) as you’re born.

[B] 語法について

(I) 二重否定

“Huckleberry Finn” ではマーク・トウェインは自在にこの二重否定の構文を使っているのが見られる。珍らしくないので数例をあげるに止める。

- 1) I couldn’t see no advantage in going where she was going.
- 2) They get down on a thing when they don’t know nothing about it.
- 3) I tried to think of something cheerful, but it warn’t (=wasn’t) no use.

- 4) But go ahead, I aint got nothing to say.
- 5) he was a-going to be a man nobody wouldn't be ashamed of.

ことわって置くが、会話の文のみならず、地の文にもこの二重否定は珍らしくないのである。勿論この二重否定は俗語及び方言用法である。

(II) 接続詞用法の without

- 1) You don't know about me without you have read a book by the name of The Adventures of Tom Sawyer.
- 2) I never seen (=saw) anybody but lied one time or another, without it was Aunt Polly.

これは Webster の大辞典によれば主に方言用法である。

(III) for to~不定詞の形式

to~ 不定詞の前に for のついた形が又時々見られる。

- 1) I'll say you've went (=gone) away for a few hours *for to get* a little rest and change.
- 2) we made a layer of dirt about five or six inches deep with a frame around it *for to hold* it to its place.
- 3) De (=the) women folks has gone *for to stir* up de (=the) relations.
- 4) Ole Mars (=old master) Saul en (=and) de (=the) boys tuck dey (=their) guns en (=and) rode up de (=the) river road *for to try* to ketch (=catch) dat (=that) young man en (=and) kill him.

大塚高信⁽⁵⁾によればこれは歴史的には方向を表わす to の原義が薄れたため、それを補なうのに for を添えることによって生じたもの、目的を示すのに to 付不定詞とともに ME で広く用いられたが、初期 Mode ではすでに少く、PE では方言、俗語に残るのみと説明されている。

(IV) 助動詞+過去分詞の形

a) ought to+過去分詞

- 1) My, you ought to seen old Henry the Eight when he was in bloom.

2) you ought to been ashamed of yourself.

これは勿論, ought to have+過去分詞の have が脱落したものであって方言用法である。

b) done+過去分詞

She (=the sheet) wuz (=was) on de clo's-line (=the clothes line) yistiddy (=yesterday), but she done gone.

南部方言では現在完了に「(have) done+過去分詞」の形が使われるといわれる⁽⁶⁾。

c) used to was の形式

Then she got to talking about...her relations down the river, and about how much better off they used to was.

これは Wright の方言辞典によると dial and colloq と説明されており, 又 Webster の大辞典によると方言用法である。上例の they used to was は正式には they used to be となるであろう。しかし又 “Huckleberry Finn” には used to be の形も併用されているのである。I shoved right into the timber where my old camp used to be. used to was は Mark Twain Lexicon によればアメリカニズムとされている。

d) like to+(have)+過去分詞の形式

“Huckleberry Finn” には次のような例文がある。

We like⁽⁷⁾ to got a hornet's nest, but we didn't.

マーク・トウェインの Lexicon によればこれは昔は be 動詞が省略された形式で用いられることが時々であったそうである。従って上例の like は were like と同じものとなる。又これと非常に類似した表現として, He liked to have died of hunger がある。空腹のためにもう少しで死にそうであったという意味である。これと同じく上例の like to は on the point of...と同意である。又同じような意味を持つ似ている用法に He had like to have been killed がある。これには he was like to の別の形として用いられるもので, 主として完了形不定詞と共に使

われる方言的用法であると OED に記されている。又 “Huckleberry Finn” には次のような文も見られる。my heart swelled up sudden, like to bust. この like は OED によれば、as if about to という意味であり、癡語であると説明されていて、例文も1530年のものが一例示されているに過ぎない。又 “Tom Sawyer” には始めから過去を明示する was のある he was so like to choke の様な文も使われている。これは岩波の大英和辞典では俗語と記されている。更に OED の「Supplement」によれば表題にかかげた文のように like=was or had like のように過去をあらわすアメリカの例文が示されて居り、矢張りトウェインの同じ例が1884年として最初に出ている。それから又表題の形式のように完了不定詞の have の略された形をもつもう一つの例文も OED に見られることからして、have のない形が起り得ることが理解されるのである。

(V) to not think of...のような分離不定詞

上例のような not による分離不定詞の例が “Huckleberry Finn” には時々見られる。

- 1) I must try to not do it any more.
- 2) I noticed the king didn't get mellow enough to forget to remember to not deny about hiding the money.
- 3) There' ain't no way but just to not tell anybody at all.
- 4) “Looky here, Huck, what fools we are to not think of it before!”

Evans⁽⁸⁾ なども分離不定詞の積極的な支持者であるが否定詞 not の分離不定詞は英語では避けられると述べているのであって、これは明らかに substandard な用法と言えるであろう。

(VI) 人+which...の用法

“Huckleberry Finn” には「人」を先行詞とする which の用法は決して珍らしくない。これは大塚高信⁽⁹⁾ によれば which を人に用いることは標準英語において18世紀以降は標準用法としてはなくなったといってよい。しかし、俗語方言ではこの which の古用法は保存されていると言われる。

- 1) Edmunt Kean the Elder, which was to play the main part.
- 2) Everybody left, anyway before the show was over, but one boy which was asleep.
- 3) There was some that they called crayons, which one of the daughters which was dead made her own self.
- 4) Tom turns to the nigger, which was looking wild and distressed.

(VII) like の接続詞用法

as if の意味に用いられる like の用法が時々見られる。若干例文をあげてみる。

- 1) That law trial was a slow business—appeared like they warn't ever going to get started on it.
- 2) She looked like there had been a cave-in in the bank there.
- 3) I said it looked to me like all the signs was (=were) about bad luck.
- 4) The fifth night we passed St. Louis, and it was like the whole world lit up.

この like の用法について大塚高信⁽¹⁰⁾は通俗体でまた特にアメリカ語法として用いられると述べている。そして主としてアメリカ南部及び西部で行われている⁽¹¹⁾と言われる。

(VIII) 分詞構文

“Huckleberry Finn” には主文に前置する分詞構文は非常に少い。しかし、主文に後置されて状況や事情を説明する分詞構文は好んで用いられていると考えてよい。

- 1) in about two minutes comes a crowd a-whooping and yelling and laughing and carrying on, and singing out.
- 2) here comes a raging rush of people with torches, and an awful whooping and yelling, and banging tin pans and blowing horns; and we jumped to one side to let them go by.

3) both of them set (=sat) at the table thinking, and not saying nothing, and looking mournful, and their coffee getting cold, and not eating anything.

1) と 2) の文も共に作者がその事態に関心や又は好奇心を持っていることを表わしているようである。このような場合にトウェインは現在分詞をいつつも連続して用いると思える。1) の場合はピーターウィルクス老人の財産の跡取りがもう一組現われたことをしらせる群衆の怒号の状況であってなかなか重大な場面である。2) の場合は Huck がずうっと行動を共にして来たならず者の「王様」と「公爵」があわれにも人々に捕えられて私刑にされて運ばれて行く状況を描写したものである。3) の場合は ing 構造を and 使っていくつも続けて行くその叙述方法は直覚的であり、素朴であってかえって鮮明なイメージを与えるように思える。

トウェインの自然描写は生々とした表現力を持っていて絶妙と称してもよいと思われるがこのような文がみられる。now you'd hear the thunder let go with an awful crash, and then go rumbling, grumbling, tumbling, down the sky... みられる通り三つの分詞形が韻もふんで居り、リズムカルで鮮やかな描写を示しているのである。

(IX) 反文法的表現

さて、此処で最後のしめくくりとして、今迄指摘しておかなかった反文法的表現や正用法でない語法を拾い出してまとめることにする。

- 1) It aint right nor kind for you to talk so to him.
- 2) And so, take it all around, we made a good haul.
- 3) "Yes; en (=and) I's (=I'm) rich now, come to look at it.
- 4) We went tiptoeing along a path,... stooping down so as the branches wouldn't scrape our heads.
- 5) At last I got so sleepy I couldn't keep my eyes open all I could do.
- 6) I couldn't stood it.
- 7) Soon as night was most (=almost) gone we stopped navigating.

- 8) They don't care a cent what a thing costs long as they want it.
- 9) I want you keep mum and not let on.
- 10) Tom Sawyer couldn't get up no better plan than what I had.
- 11) He warn't (=wasn't) hanging back any.
- 12) I been there before.
- 13) He was saying how the first thing he would do when he got to a free state he would go to saving up money and never spend a single cent.

1)の文は無論正用法に従っていない。It ain't kind of you to talk...となるべきである。2)の take it all around というのは on the whole と同じ意味であってこれは to の略された to take it all around という独立不定詞と考えてもよい様に思う。3)の文の come to look at it「考えてみれば」も同じように解釈してもよさそうに思える。4)は正式には so that the branches wouldn't...となるべきところである。しかし豊田実博士⁽¹²⁾によればこの語法はアメリカの口語体に用いられると言われる。5)の文では all の前に for を補って for all I could do とすべきであろう。6)は stood の前に have が略されている形である。これについては“Huckleberry Finn”に Jim said the moon could' a' laid them. という文がある。have が a と短縮されて脱落する一步手前の現象を示唆している様に思える。7)は as soon as となるべきところ。この前に as のない形は OED によれば今日では詩語であると言われる。8)も当然 as long as となるべきである。9)は文法的には明らかに to keep⁽¹³⁾ と to 付不定詞となるべきである。10)の than what...は比較の副詞節を導く接続詞で俗語方言である。11)の any は副詞で OED によれば at all を意味し、方言であってアメリカ語法とある。12)の been は have の省略されたもので Perfect をあらわし、成句であって「実地を踏んで来た (からよく知っている)」という意味である。13)は破格構文であると思われ、これを論理的な構文にすると the first time (or as soon as) he got to a free state... となるであろう。

3. む す び

マーク・トウェインの「ハックルベリ・イフィンの冒険」は会話の文のみならず地の文までもミズリイ地方の口語スタイルで書かれているという点において全く特異なものと言ってよかろうと思う。その口語スタイルについてはこの拙論である程度は明らかにされたと思われるが、この「ハックルベリ・イフィンの冒険」は小説手法としてもトウェインにとって実験的な試みであったと想像されるのである。文学上の一つの冒険であったとも考えられる。トウェインの偉大さはどのアメリカの作家よりもアメリカの口語を自由自在に駆使した所に存することは明らかだがこうした徹底した作家精神や力強い意欲があったればこそ始めて、Huckのような生命力を吹き込まれた少年像を創造できたのであろうと思われるのである。

(注)

- (1) Colloquial Style in America
- (2) 現代米語文法, 接続詞 p. 139.
- (3) アメリカ語法の研究 “Flat Adverb” p. 58.
- (4) Colloquial Style in America. pp. 35~6 pp. 126~27
- (5) 新英文法辞典 p. 494
- (6) 現代米語文法「動詞」p. 105.
- (7) この like to の形式を一種の助動詞と筆者は見たい。
- (8) A Dictionary of Contemporary American Usage 「split infinitive」
- (9) 英語慣用法辞典「which」p. 1223.
- (10) 新英文法辞典「as if」p. 135.
- (11) 豊田実アメリカ英語とその文体 p. 38.
- (12) アメリカ英語とその文体 p. 38.
- (13) 研究社英米文学叢書1970年版と Macmillan 社刊行の「Huck Finn and his Critics」
では共に keep となっているが、Penguin Books では to keep となっている。

参考書目

Evas B & C A Dictionary of Contemporary American Usage

市川 三喜 英語学辞典

マーク・トウェインの英語

- 大塚 高信 英語慣用法辞典
" 新英文法辞典
尾上 政次 アメリカ語法の研究
" 現代米語文法
Bridgman, R. Colloquial Style in America
齋藤 勇 アメリカ文学史
豊田 実 アメリカ英語とその文体
細入藤太郎 アメリカ文学史
Lettis, R. McDonnell, R. Huck Finn and his Critics & Morris, W.E.
Ramsay, R.L. & Emberson, F.G. A Mark Twain Lexicon.